



池田カトリック新聞WEB版

2023年11月号
(597号WEB版)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任： 中村克徳司祭

住所： 〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL： 072-751-2400 FAX： 072-753-4624

URL(ホームページ)： <http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

あえて助けてもらう 司祭 来住英俊

11月の表紙絵について

11月のガラスケースのみ言葉と解説

宝塚黙想の家からのお知らせ

WYD Lisbon 2023 の報告 その2

巻頭言

あえて助けてもらう

御受難修道会司祭 来住英俊

外食する時に、いつも 印象深く思うことがあります。私が食後の菓を飲もうとすると、頼む前から店の人が水がさつと出してくれることです。ほとんどの食堂がそうなのです。

これはどういうことかと考えてみると、人間は誰でも人に親切にしたい気持ちを持っていて、その機会を求めているものである。水出しは単純な行為なので、すぐに行動に移せるのでしょう。

ところで、このような親切を提供された時、反射的に「いや 大丈夫です」とか「自分でできますから」と言うてしまう人は多いと思います。私もそうでした。しかし、今は 即座に親切を受け取るようにしています。

なぜ私たちは反射的に「いや大丈夫です」と言うてしまうのでしょうか。私の年代なら 体に染み込んでいる「他人様に迷惑をかけてはいけない」という 遠慮のせいもあるでしょう。

しかし、もっと大きい理由は、「他人との関わりは できるだけ少なくしておいた方が 無事だ」という無意識の考えではないのでしょうか。しかし、キリスト教は、人との関わりは増えた方が人生は豊かになると考えるものです。イエス・キリストは神でありながら、あえて人となって、人と関わりを求められたからです。

自分独りでも出来なくはないことでも、助けを求めるようにしたらどうでしょう。新幹線の自由席が満席の時、二時間くらい立っていることは不可能ではありません。しかし、通路を歩きながら探していると、三人席の真ん中が空いている場合が結構あります。「そこ空いて

ますか」と声をかけると、「ああ空いてますよ」と答えてくれることは多いのです。コツは 明るく 声をかけることです。

空いている席の隣に座っている人は「誰も 来なければいいがな」と思っているものです。それが分かっているのに、嫌な顔をされるんじゃないかと恐がって声をかけがちです。しかし、明るい声は 明るい応答を引き出す可能性が高いのです。

真ん中の席に荷物が置いてある場合もあります。その場合でも、まだ諦める必要はありません。隣の席の人が置いている荷物である可能性もあるからです。満席なんだから 席を空けておけよと思いますが、そこが楽に旅をしたい人間の弱さです。明るく声をかければ、あっさり 荷物をどけてくれることもあります。「連れが来ますから」と言われる場合もあります。本当の場合も、嘘である場合もあるでしょう。いずれにしても、そんな時はあっさり「ああ そうですか」と引き下がれば いいのです。ここでも明るい声がコツです。

世の中には危険な人も いることは事実です。知らない人と関わる時は賢明さが必要ですが、こういうケースで 殴りかかってくる人はありません。感じの悪い応答をされるくらいなら、人生の一部です。「蛇のように賢く、鳩のように素直に」(マタイ10章16節) 助けを求めていきたいものです。そして、「すみません」ではなく、「ありがとうございます」と言って好意を受け取ると、少しだけ世界が違って見えます。

11月のガラスケースのみ言葉
求めなさい。そうすれば、与えられる
マタイ7章7節

11月のみ言葉についての解説

中村克徳 神父

これは私が千葉の教会で働いていた時に実際に体験した出来事です。夕方の御ミサが終わって外に出たところ、一人のご婦人がやって来て、主人に洗礼を授けてほしいと願ったのです。その人は病院に入院中で、病状は思わしくないようでした。主任司祭に相談したところ、「あなたが病室に行って洗礼を授けてきなさい」と言われたので、早速予定を組んで一人の信者さんに案内してもらい、病院に出掛けました。

病室の手前に差し掛かると、見覚えのある名前が目に留まりました。それは重い病気で入院中だと聞いていた、教会の信者さんの名前だったのです。携えてきた御聖体の数に余裕があったこともあり、わたしは先に彼の病室を訪ねました。思っていたよりも元気そうだったので、私は胸をなでおろしつつ彼に御聖体を授け、「これから隣室の患者さんに洗礼を授けてきます」と言い残して病室を後にしました。

受洗する人は40代後半の方でした。受洗に必要な幾つかの質問をすると、受洗の意思を小さな声で表明したのです。主の祈りを唱えられますか、と尋ねると、「はい」と答えが返ってきました。すると、彼の奥さんは私に一冊の小さな本を手渡してくれました。それは信徒向けの小さな祈りの本で、擦り切れてボロボロの状態でした。聞けば、彼は建設会社の社長さんで、仕事が忙しくて教会を訪ねることができないため、奥さんが彼のために祈りの本をプレゼントしたのです。「これだけ祈り込んでいるなら、洗礼の準備はできていますね」と告げると、奥さんは私に言いました。「神父様、もう三冊目です。前の二冊は壊れてしまって使えなくなっていました」と。彼は朝早くから夜遅くまで仕事に没頭

していたため、腰を据えて祈る時間が取れないので、仕事の合間を見つけては場所を厭わず祈っていたそうです。私は驚くと同時に、彼の強い意志と信仰の深さを強く感じました。

すぐに洗礼の準備に取り掛かると、代父となる人を決めておくのを失念していたのに気がつきました。私を病院に案内してくれた信者さんは女性でしたので、誰か男性の信者さんをお願いするのが一般的な選択です。そういえば・・・、私は隣の病室に相応しい人がいたのに気がつきました。事情を話したところ、代父となることを快諾してくれましたので、洗礼式をスムーズに進行することができたのです。式の終わりごろ、この信者さんは点滴のスタンドを片手に病室まで足を運んでくれました。彼は代子となった受洗者と笑顔で対面した後、私にこう告げたのです。「神父さん、私の趣味はね、代父になることなんです。全国に私の代子が何十人といえます」と満面の笑顔で話してくれました。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」とイエス様は弟子たちに教えられました。受洗者は奥さんの信仰に支えられて、教会に行けなくても祈りによって神様への深い信頼を培い、神様から恵みを引き出すことができたのです。

ひと月ほどして、彼は神様が用意してくれた場所に旅立ち、後を追うように代父となった信者さんも帰天されました。きっとこの二人は神様のもとで、笑顔で語り合っているに違いありません。私たちも、いかなる状況に置かれても神様への信頼を失うことなく、恵みを求め、探し、諦めずに門を叩き続けていきたいものです。



こんにちは、去る8月1日から6日までのポルトガル・リスボンで行われたワールドユースデーに参加していました三島陽です。先月号のからしだねに掲載された四倉夏君の記事に引き続き、私からは8月3日～5日の期間に経験したことを簡単に紹介させていただき、その中でも特に、この期間での教皇様の言葉を通じての感想をお話させていただきたいと思えます。

8月3日、この日は前日にポルトガル・リスボンに到着された教皇フランシスコの歓迎式典がありました。宿泊していた学校から歩いて30分ほどの広場が会場であり、私たちのグループはそこまで歩いて向かうことになりました。同じ会場を目指す様々な国の若者たちと時には会話を交わし、時には自分の国の歌を歌い、とても賑やかな光景が見られました。そのような光景を見、またその輪の中に加わりながら、教皇様への歓迎の気持ちや大きな喜びの気持ちを感じました。そのような大変大勢の若者たちの

中、少し遅れる形となってしまった私たち

が陣取った場所は会場のメインステージからは若干遠い場所でした。しかし幸運にも、その場所は会場に入られた教皇様がいわゆる“パパモービル”で移動される経路にあったのです。教皇様が車から私たち若者に手を振っている姿を見て感激もひとしおでした。

歓迎式典では若者による演技等の後、教皇様が祈りへの招きの言葉を述べられました。教皇様は其中で、「神様は皆を呼ばれている(スペイン語で「Todos todos todos!」)」ことを繰り返し強調されました。その神からの呼び掛け、また神からの愛を感じながら勇気を持って前進するよう呼び掛けられました。この「前進する」ことはこの大会を通して教皇様がつねに強調しておられたメッセージだったように思います。コロナのあとはじめての大会であり、現に戦争も進むなか、若者たちにそれらの出来事や苦難にも恐れずに神の愛を持って歩み続けなさいという教皇様のメッセージ

は私たち日本人の若者にも強く響きました。

8月5日、この日は翌日に控える閉会ミサのため、会場のある川沿いの広場まで徒歩で移動しました。泊まっていた学校から約15キロの道のりを、30℃に迫ろうかと云う気温の中、約4時間をかけて歩き抜くことができました。途中、沿道の方々がたくさん声をかけてくださったり、またある方々は水をくださったりと、リスボンの地域全体でワールドユースデーを歓迎している様子でした。会場についたころには既に多くの国の若者が到着しており、各国の国旗やグループの旗がはためき、歓迎式典での約30万人から約150万人に増えた人々による熱気と賑やかさに包まれていました。ここでもまた、私たちの割り当てはステージから少し離れた場所だったのですが、すぐ横の通路を前夜祭に向かわれる教皇様が通られました。私は2019年の教皇様の来日ミサにも参加したのですが、今回のワールドユースデーで教皇様をより身近に感じることができたのは自分自身にとって大きなことだったように思います。

教皇様は前夜祭の祈りの中で、「倒れないことではなく、倒れたままでいないこと」を強調したお話しをされました。前述した教皇歓迎式典での言葉と同様、今の社会を信仰のもとに生きる若者に対して最も教皇様が伝えたかったメッセージであり、また招きの言葉だったのだと思います。「神は皆に呼びかけられている、その呼びかけと愛にこたえて喜び勇んですすんで行こう、進む中で倒れることもあるかもしれない、しかし倒れることを恐れるのではなく、倒れても再び起き上がってゆこう」教皇様のメッセージはこのように要約できるかもしれません。これはワールドユースデーのテーマにも共通するのではないのでしょうか。個人的な話をすれば、私がこのワールドユースデーに参加した目的は信仰生活に悩みや苦しみがあったからであり、リスボンに向かう私の足取りは必ずしも喜びに満ちたものではありませんでした。し

かしこのメッセージを教皇様から、さらには神様から受け取った後のリスボンからの帰りは間違いなく喜びに満ちたものでした。その喜びは神様からの「また私のもとに戻ってきなさい」という呼びかけを確かに感じたからであり、それこそリスボンで、あるいはワールドユースデーにおいて、私がいただいた最大のお恵みだったように感じています。

以上、長々とお話してきましたが、この8月3～5日の期間に私は教皇様のメッセージを通じて色々なことを考え、その思いを今回一番大事にしていました。この文章ではそこで得たものを皆様にお伝えできればと思う次第です。長文にお付き合いいただきありがとうございました。

最後になりますが、この度のワールドユースデーの参加にあたり池田教会の皆様より、たくさんのご支援とお祈りをいただきました。この経験を信仰生活に生かしてゆけるよう頑張っていきたいと思います。末筆ながら感謝申し上げます。ありがとうございました。



11月の表紙の絵について

11月22日は聖セシリアおとめ殉教者のお祝い日である。セシリアという霊名をいただいております方は、聖セシリアがどんなことをなすとげられて聖女とされたのか、ご存じであろう。しかしなじみのない方もおられるのではなからうか。聖セシリアは176～180年頃、つまり初期キリスト教の時代に、シチリア島で殉教したと言われる。伝説によると、世俗の音楽の演奏をこばみ、楽器を奏でながら神を賛美して歌い続けたので、首を切られた。首を3回切られたが、それでもまだ生きていたので死刑を中止され、その後3日間生き延びたと伝わっている。それゆえ、音楽家と教会音楽、そして目の不自由な人の守護聖人とされた。

表紙の絵はラファエロ・サンティが1516～1517年に油彩で制作した祭壇画である。中央に立つ聖セシリアと、彼女を取り巻いている人物たちは、頭上から聞こえる天使の合唱隊の音楽に聞き入っている。聖セシリアが手にしているハンドオルガンは今にも手からすべり落ちそうだ。足元にも世俗の音楽を示す楽器が捨て去られている。聖セシリアの左で剣によりかかっているのは聖パウロ、その後ろは福音記者聖ヨハネ、右側で司教杖を持っているのは聖アウグスティヌス、そしてアラバスターの壺を持っているのはマグダラのマリアである。

この作品は現在、ポーロニャ国立絵画館に展示されている。

11月宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会 10:00～15:30

11月16日(木) 指導：染野 治雄 神父

11月24日(金) 指導：山内 十束 神父

■ カトリック教会のカテキズム

11月01日(水) 10:00～12:00

11月15日(水) 10:00～12:00

指導：染野治雄 神父

■ 聖地エルサレムを学ぶ

11月09日(木) 10:00～12:00

指導：笹田六合豊 修道士

■ 聖書の基本

11月15日(水) 10:00～12:00

11月22日(水) 10:00～12:00

指導：山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎0797 (84) 3111

編集後記

10月に発表されたノーベル賞の授賞者に日本人の名がなかったが、米国のシンクタンクから「バーグルエン哲学・文化賞」を昨年末に受賞した柄谷行人氏の最近の著作が話題を呼んでいる。

その柄谷氏は1941年に西宮で生まれ、甲陽学院・東京大で文学・経済学・哲学を修めて、社会システムの歴史を「交換」の様式から分析する理論「交換様式論」を打ち立てられたという。狩猟採集の遊動型社会から定住型の有機的な氏族社会へと変化した後では、共同体の成員は、互酬的な贈与と返礼の交換様式Aが働き、個人の平等性と個人の独立性（自由）が保持されていたという。

その共同体の規模拡大につれて、顕れた王と呼ばれる統率者による人々の保護と人々による王への服従を主なる交換とする交換様式Bに変わり、更なる版図拡大によって複数の領主のグループを持つローマ国やバビロン国のような強大な権力者のもとに祭政一致の帝国も生まれた。

近代になって国や帝国の内外との放牧を生業とする流動民による物々交換から通貨と商品の交換様式Cが主な交換様式に変化して、手工業製品を商品化した近代都市を持つ国家は経済力も増大させ、帝国主義的な戦争の不安や差別的圧制に人々を怯えさせ、人々は互酬的でない交換様式Dをする遊動型の小さな狩猟採集共同体への起こり得ぬ回帰を夢見るようになったと柄谷氏は指摘している。

来住神父様があえて助けてもらって、「ありがとうございました」と応える—と巻頭言で勧めておられる言葉による交換様式が互酬的なのを超越しているように感じるのは私だけでしょうか？

隼雄